

鴨 東 通 信

秋

2011.9 No.83



●東山歴史逍遙 其一
京都に息づく熊野信仰

天野太郎

●てーたいむ

焼畑から人と自然の関係を再考する

原田信男・鞍田崇

●エッセイ

船簞笥の面白さ

小泉和子

実学者洪大容との出会い

仁 正熾

●リレー連載 世界のなかの日本研究8

東アジア近現代文学史を夢みて

梁 東国

●史料探訪

舍利容器

片山寛明

シリーズ古典再生3

歴史のなかの源氏物語

山中裕編

【10月刊行予定】

▼四六判・二九〇頁／定価二、三二〇円



『源氏物語』のなかに、この時代の世相が、どのように反映しているか。撰閲時代の文化のあり方、女流日記と女房文学の本質、とくに藤原道長の存在と紫式部との関係に重点を置いた編者渾身の『源氏物語』論を第一部とし、第二部以降では、準拠論、節会の本質と意義、年中行事・通過儀礼の宴と儀式の本質など、一五人の気鋭が、歴史のなかの源氏物語について最新の研究成果を展開する。

内 容	
第一部 歴史のなかの『源氏物語』	(山中 裕)
『源氏物語』誕生の歴史的背景	
第二部 準拠と古注釈	
『源氏物語』における準拠とその意味	(藤本勝義)
「準拠」の来歴について	(佐藤信一)
秋好中宮の童女	(松野 彩)
『源氏物語』の古注釈と歴史	(松岡智之)
延喜・天曆の治	(木村由美子)
失われた空間の物語	(塚原明弘)
——『河海抄』の延喜天曆準拠説——	
靱負尉と簾中の人影 ——松風巻試解——	(吉田幹生)
第三部 風俗と通過儀礼	
節会と宴 ——紫式部の描く王権——	(大津 透)
「おほぎみ姿」について	(近藤好和)
通過儀礼に対する平安貴族の認識	(武井紀子)
——産養をめぐる——	
光源氏の元服と穀倉院	(磐下 徹)
「基聖が基にはまさらせたまふ」浮舟考	(川村佐和)
第四部 『源氏物語』をとりまく文学	
『紫式部日記』の紫式部	(池田尚隆)
源氏物語の和歌批評と漢詩文引用	(飯沼清子)
歴史物語はなぜ書かれたか	(中村康夫)

一千年目の源氏物語

シリーズ
古典再生 1

伊井春樹編

東京・京都で行われた二つのシンポジウムをもとにし、斯界の識者による『源氏物語論』を集約。
▼四六判・二五二頁／定価一、六八〇円

日本の心と源氏物語

シリーズ
古典再生 2

岡野弘彦編

宮中歌会始の選者を永年務めた編者が、『源氏物語』に流れる日本の心を読み解く。
▼四六判・二四六頁／定価一、八九〇円

夏の京都観光の喧噪から東大路七条を南にしばらく下ると、西側に鮮やかな社叢の緑が目飛び込んでくる。新熊野神社と書いて「いまくまの」と読むこの静かな社はまた、東山区の古代史を語る上で欠かせない存在でもある。

遠く紀州熊野三山への参詣は、京都から往復約七二〇キロ、平均所要日数二五日という道程の厳しさから、その多くは修験道の道であった。そうしたなかで最初

に熊野御幸を行ったのは十世紀初めの宇多法皇とされるが、院政期になると、

白河上皇が寛治四年（一一〇九）を皮切りに九回の参詣を重ね、ついで鳥羽上皇は二一回、さらに後白河上皇に至っては実に三四回もの参詣を数えた。

この後白河法皇が東山の地に院の御所を構えたのが、法住寺殿である。十町あまりの広大な敷地には、北殿・南殿・西殿が造られ、平清盛の寄進になる蓮華王院（現在の三十三間堂）もその敷地内に建てられ、まさに院政期の政治中枢として機能し

京都に息づく熊野信仰

賜^{たま}へ若王子（二五八）という歌がある。まさに新熊野神社は、こうした古代における熊野信仰の象徴的存在として、

さらには院の御所の鎮守としての役割も担っていた。

法住寺殿はその後木曾義仲による攻撃を受け、現在は蓮華王院をはじめとして御白河法皇陵の傍にたたずむ法住寺、そしてこの新熊野神社など「点」としての名残がみられるに過ぎないが、平安時代末期の武家勢力の台頭という時代の転換点に造営された、東山の広大な栄華の跡をたどるのも一興であろう。

（あまの・たろう 同志社女子大学准教授）

東山

歴史逍遙

天野 太郎

（其一）

歴史豊かな京都・東山の地への事務所移転にちなんで、今号より、気鋭の歴史研究者による東山が舞台の歴史エピソードを、連載で紹介いたします（全四回）。

●歴史のなかの焼畑

——今秋刊行の『焼畑の環境学』では、様々な分野からの報告がまとめられています。編者のお二人が焼畑に興味を持たれたきっかけは。

原田・僕はもとと専門が中世村落史なのですが、畑作論が中世史のなかでかなり盛んだった時期がありました。近世村落の研究もしていたので、近世における水田の発達に興味を持っており、中世畑作論に関しては少し違和感を持っていた。何よりも中世では近世と違って、畑地を帳簿類で捉えることはかなり難しいし、良くも悪くも、その究極に焼畑があると思えたのです。もうひとつは、一般の水田とは違う粗放な水田ともいべき摘田や掘上田を研究していましたので、同様な関係が、普通の畑と焼畑にもあると思いました。耕地のさまざまな実態をきちんと見たいと思い、焼畑のことを考えていたときに、たまたま東北芸術工科大学で焼畑の共同研究をやらせていただきました(笑)。二〇〇三年のことです。それからずっと焼畑の勉強をしています。

しかし最初にはつきりいって手探り状態でした。

てい—たいむ

焼畑から人と自然の関係を再考する

はら だ のぶ を
原田 信男

(国士館大学21世紀アジア学部教授)

くら た たかし
鞍田 崇

(総合地球環境学研究所准教授)

た。とにかく焼畑というのは、記録に残らない。もちろん古い文献なんかも一応読んだりしたけれども、少なかった。地理学とか民俗学ではありましたが、歴史学の研究はほとんどありませんでした。

鞍田・僕の場合は地球研(総合地球環境学研究所)で佐藤洋一郎副所長がリーダーを務めたプロジェクト(「農業が環境を破壊するとき」、二〇〇六〜二〇一〇年度)が直接のきっかけです。そのプロジェクトは農業を歴史的に再考する中で、今後の環境問題もふまえた基礎的な農業のあり方を探ろうということだったので、その最後の部分で焼畑のグループとの接点ができました。プロジェクトのテーマの一つが、歴史的に農業を考えることだったので、従来の農業では実は漏れていたところに焼畑という問題があつて、それをもう一度再評価しようということと、焼畑の実態、たとえば肥料の活用の問題であるとか、土地の利用の仕方の問題に着目しました。ほぼ半世紀ほど近代農業で使用されてきた数々の化学肥料、土地の集中的な利用というものを考えた場合、その対極にあるのが焼畑なので、現状の農業のあり方に対して反省を促

す一つの材料としても注目できるんじゃないかと考えたのが、一番大きなきっかけですね。

●焼畑に対するネガティブなイメージ

原田…今回企画をおこなす上で大きかったのは、焼畑に対する否定的なイメージです。本書にも書かれていますが、コマーシャルの影響（二〇〇二年、コスモ石油の新聞広告およびテレビコマーシャル。森林が激しく炎上する映像とコピーによって、森林保護と焼畑の対立関係を印象づけた）がありました。あれはとんでもない誤解なので、それをきちんと説明する必要があると、佐藤さんをはじめ皆さんで考えていました。

鞍田…環境破壊の一つの大きな原因になっているという焼畑観、冒頭で原田さんがおっしゃったような焼畑に対する排除の歴史、それが二重になって焼畑に対する正当な評価がされていなかった。その一方で焼畑が実は意外とまだ日本でも行われていたり、再興しようとしている動きを皆に知ってもらおうと同時に、焼畑を行っている人同士のネットワークが作れないかという目的がありました。シンポジウム・エクスカーションを含めた焼畑サミット（高知・山形・大分・京都で開催）も、このプロジェ



原田氏

クトの中では大きなイベントとして位置づけられてきたと思います。

原田…今までシンポジウムというと、研究者ばかりがメインになってきましたが、焼畑サミットでは、焼畑の実践者を含めて、市民レベルから焼畑の現在を考えようという問題提起をしようとしたことが非常に大きかった。焼畑を行っている人たちに話を聞く、もちろん好きだからという部分もありますが、やはりいくつかメリットがあるのです。そこで従来注目されてこなかった部分にスポットを当てました。肥料がいらないことのほかにも発芽の促進や、作物の味の良さなどの利点があります。これについては農学専門の人が焼畑を現場で見ても、実験してみると、その効果が

科学的に検証されたりしました。今までの個別の研究の枠を出なかつた焼畑研究に、今回科学的なデータという有力な側面から、その本質に迫れたという風に思っています。

●火と山の文化

— 実際に焼畑を見て感じられたことは。

鞍田…広い意味での火の文化ということがあります。ここ一〇数年位、野焼きが禁止されたり、生活の中で火と接する機会そのものが少なくなっていますよね。人類は最初から火と対峙してきたわけで、生活から

それを失ってしまったことで、自然との関わりについても何か大きなものを損失したのではないかと感じました。それをふまえて今回の本では、食物を生産するための焼畑だけでなく、野焼き・山焼きなども扱っています。

原田…火の利用は、衣食住も含めての話で、私たちの生態系をどうやって維持するかという問題にもかかわることですね。アボリジニはクールファイアという秀れた技術を持つていますが、火を制御する技術というのは、実に長い歴史の中で培われてきたものなのです。ところが便利さや安全性のみを追求するあまり、逆に火を悪者にして、なるべく回避しようとした結果、火を制御する技術を失った。拙論でも取り上げましたが、既に中世の史料に、火を入れれば、草がよく生えるという事が書いてある。火が身近にあった時代には、火のメリットというものを、みんなよく知っていたのに、近代化の過程で急速に失われてきた。

鞍田…里山の議論というのがあります。無垢な自然に対して人間は、里地という管理しやすい自然を作ってきました。今回の本ではアジア・アフリカも入っていますが、日本に関して言えば圧倒的に山国であって、火の思想、火の文化と同時に山の文化とも密接に関わってきます。焼畑とは、と言うときには、では火を、山



鞍田氏

をどう考えるのかということにパラフレィズされていくのではないのでしょうか。

原田…佐藤さんもよく言われますが、日本の国土で人間の手が入っていない山はどこにもない。日本人は長いこと山と親密な関係を持つてきた。ある部分は手を入れたつも自然に任せて、その境界からは野生動物が出てこないとか、そういう拮抗関係を作って暮らしてきた。それが最近、崩れていると感じます。田んぼにしても休耕田が多くなって、そこがまたあつという間に山化して、熊や猪が出没するようになったり、

非常にバランスがおかしくなっている。

焼畑反対者の中には、火を放つことよって、土の中にある動物を殺すから、多様性を失わせていると信じている人もいるんですね。それは大きな誤解です。大自然は生き物同士の、死ぬか生きるかの大ストラグル（闘争）をやっているわけです。例えば雑草を抜いてやれば、ほかの種類の雑草が生えてくるし、それを抜けば、同様にまた繰り返される……。そういう戦いが行われているのは、土の中、山の中でも同じだし、もともと人間にとつて都合のいい自然を作り出すために、我々は地球全体の生命の管理をしてきたのです。

ただ我々は、自然に対する認識が完璧じゃない。原発の問題で

もそうです。結局自然に対する認識が完璧でないにも関わらず、非常に安易に「科学」に頼り便利さを追い求めてしまう。そしてそれを一度選択してしまつと、裏側にあつた雑多な知恵や技術の体系も一緒に捨ててしまう。そういう我々の不完全な自然観を、焼畑を通して見直すことが、重要なのだと考えています。

●研究者の役割

原田…自分の研究方法もそうなのですが、僕は演繹法よりは、帰納法を選びます。それは演繹法というのは、前提が違つてしまつと非常に怖いことになるのです。さっきの自然観の問題ではないけれども、ある意味では前提の認識が狂つていくことのほうが多いわけで、そこから論理的に演繹してくると、見落とす部分が多なり出てきます。それよりは帰納法的に、様々な技術をどのよう^いに継承するか、それにどういう改良を加えたらどうなるか、という試行錯誤で積み重ねられた知識体系をきちんと認識することのほうが、はるかに価値が高いと思つています。

鞍田…伝統知、経験知ですね。

原田…焼畑にはそれらが詰まつているということです。

鞍田…例えば生態学でも、伝統知に対する再評価が最近進んでいて、取り組みはあるんです。問題は伝統知はあくまで伝統知であつて、一方で廃れることに理由もあるから、その実態の保存や保管のために、研究者の役割が大事になるのではないでしようか。そこから創造は出来ないのかもしれないですが。

原田…ただ伝統知が廃れるというのも、それは伝統知のほうにその原因があるのではなく、単に利便性や経済性のみを追求して、新しい技術に置き換えていく時の姿勢に、問題があるんだと思います。もちろんメリットがあるから新しい技術が開発されるので、それ自体を否定するわけでは全くありませんが、その時に失つてしまふ可能性の高いものをどう見直していくかという認識がないと、とても恐ろしい結果になります。それが逆に言えば今の近代文明が持つている落とし穴なのです。最近はみんな、そのことになんとなく気づいているけれど、うまく論理化出来ていません。

結局焼畑研究とは何かというと、やはり自然と人間がどうつきあうのか。その中で、経験知として積み重ねられてきた、古^{いにしよ}からの火の思想や技術を、今後の世界観・思想にどのような形で反映していくか。過去の遺産をきちんと見据えて、正当に評価し、伝えていくことが研究者の使命なんだろうと思ひます。

(二〇一一年八月三日 於・思文閣出版)

船簞笥の面白さ

三月に思文閣出版から『船簞笥の研究』を出していただいた。そこで船簞笥というものを少し紹介させていたただく。

船簞笥は江戸時代から明治はじめにかけて物流の中心だった廻船において船乗りたちが使っていた収納具である。手提げ金庫にあたる懸硯かひますりと、やや大形の帳箱、それと衣裳櫃はんがひの半櫃はんがひの三種があり、主に使われたのは懸硯である。

当時は航行するにあたって「船往來手形」や「船鑑札」といった必携文書のほか、積荷に関する「送状」や「売買仕切」などの重要書類もあったので、これらを入れるための懸硯は必需品で、ほとんどの船にあったものである。ただし船の備品ではなく、船乗り個人の持ち物だったため、必要性和買う力のある船頭とか船方三役とよばれた榭取かとり・親仁おやじ・賄まかひ（知工ちくとも）あたりまでで、一般の水主かこ（船員）たちはふつうは持たなかった。

周知の通り、当時の日本の海運には江戸、大坂をつなぐ太平洋側の東回り航路と蝦夷地と上方を往復する日本海側の西回り航路の二大動脈があり、前者には檜垣廻船・樽廻船、後者には北前船が活躍していた。檜垣・樽廻船は経営形態からみると、運賃積と

いつて荷主の支配のもと廻船仕建や積荷、荷受け業務、運行を行って運賃ほか諸経費を受け取る仕組みで、北前船は船主が自分の資金で物資を買い入れて運んでいつて売る買積である。商業機能と運送機能が未分化で、遠隔地間の価格差が利潤となる。

西回り海運が発展しはじめるのは一八世紀後半から一九世紀にかけてであったが、日本海側は経済的地域差が著しかったことから価格差も大きく高収益がもたらされた。投下資本にあたる船の建造費も二年で完全に償却できたほどだったという。

当然、乗組員の給金にも影響する。固定給は運賃積も買積もあり差はなかったが買積の場合は、「帆待ほまち」や「切出きりだ」が認められており、これが大きかった。「帆待」は、積載量のほぼ一割が船頭分として認められていたから、仮に一航海で千両の利益が上げれば、船頭は百両前後の収入になる。このため「船主船持、船頭金持」といわれ、金を蓄えて船を買って、自ら船主になる船頭が続出した。「切出」は、本来は積荷の出目、つまり積み込み時と荷揚げ時の荷物の量目の差を水主たちの収入とすることであるが、実際は歩合制で売上代金の約5%が水主一同に支払われた。

小泉和子

こうした金持の水主たちをターゲットに発展したのが日本海側における船簞筒製造である。もちろん船簞筒は運賃積船でも必要だったから大坂や江戸でも製造されていた。だがこちらは船頭といえども固定給だけだったため、船簞筒に贅沢をする余裕はなく、ごく実用的な作りで特筆するほどのものではなかった。

日本海側の船簞筒産地で、とりわけさかんだったのは佐渡の小木湊である。小木湊は風待ちの避難港として良港だったことで大勢の船乗りが上陸した。このため船簞筒製造業が発展し一大産業となったのである。職人や金具鍛冶もたくさん集まり、湊の近くには箱屋とよぶ船簞筒屋が軒を連ねていた。台風シーズンの二十日、二百二十日前後など、風待ちの船が数百艘も集まってきたため、旧盆頃には売り切れてしまうほどだったという。

船頭たちは金に糸目をつけずに豪華なもの、力強いものをと求めた。これにに対し職人たちは、その期待に答えるべく、立派なもの、人より少しでも抜きんでたものをと競って作りあげていった。これが船簞筒である。精緻な指物技術、木目の美しい櫛に艶やかな拭漆塗、鉄の工芸品のような見事な装飾金具、圧倒的な存在感のある重厚にして華麗なデザインである。内部もまた銭箱をはじめとする櫛に拭漆塗の立派な箱、二重三重に仕込まれた桐箱や抽斗と寸分の隙もない。とくに知恵の限りを尽くしたからくり細工の見事さ、凄さ、これでもか、これでもかと、あたかも船乗りに対する職人からの挑戦のようである。あるいは働く同志としての連帯のメッセージでもあったのか。

しかも重要なことは、豪華ではあっても蒔絵や金銀、金貝などといった、当時民衆に禁じられていた材料は決して使っていないことである。これは船簞筒の注目すべき点である。使っているのは民衆にも許されていた櫛、桐、杉、拭き漆、鉄だけである。それを最大限に活かして、あれだけの見事なデザインに作り上げた職人たちの腕と造形力の高さに驚く。

それと感心するのは、金でも銀でも充分使える財力を持ちながら、それらを無理に使わせようとはせず、職人の腕を信じ、作り上げた製品を賞賛し、喜んで買い求めた船乗りたちの堅実さ、まともさである。これもいかに金持だったとはいえ、自らの才覚と身体を使い、荒海を渡って文字通り命がけで稼いだものだったからであろう。



佐渡小木製の帳箱(1872)

船簞筒が作られていたのは小木湊だけではなかった。数は小木湊に及ばなかったが羽前酒田湊、越前三国湊などでもそれぞれの特色を備えたすぐれた製品が作られている。

船簞筒がなかったら日本の家具文化はずいぶん寂しいものとなっていたと思うのである。

(昭和のくらし博物館館長)

実学者洪大容との出会い

任イム
正ジョン
懌ヒョク

京都銀閣寺に程近い住宅地の一角に、京都大学人文科学研究所（人文研）がある。一九三〇年に建てられた研究所は中庭を囲むように各研究室があり、正面の塔のような図書収蔵庫には漢籍を中心とした貴重な書籍が、その反対側の建物には様々な考古学的資料が保管されている。中国科学史研究の第一人者として知られた藪内清が教授を務め、優れた研究成果を世に送り出してきた日本における科学史研究のメッカともいえる場所である。その静かな佇まいは伝統の重みを感じさせるのに充分であるが、今年一月、二度目に人文研を訪れた際には、最初のときよりも感慨深いものがあった。というのも、この日はまず拙著の出版と関連して思文閣出版編集部を訪ね、自身の研究に一つの区切りがついたという思いがあったからである。

わたしの専攻は物理学であるが、ある時、朝鮮には物理学者はいなかったのか？ という問いが頭をよぎった。もちろん、ここでいう物理学とは厳密な意味ではなく、物理的理論あるいは技術のことである。ところが、その時まで朝鮮科学史についてまったく知らなかった。そこで、まずは関連する本を読もうと大学の図

書館を探したところ、李容泰編『わが先祖の誇り——科学と技術の話』（全二巻）という本を見つけた。青少年に向けての分野別解説書で、一九五六―五七年にピョンヤンの国立出版社から出版されたものである。古い本ではあるが各分野の第一人者といえる人たちが執筆したもので、今日までその価値を失っていない。

この本で出会ったのが一八世紀の実学者洪大容（一七三一―八三）であり、彼の地転説であった。コペルニクスの地動説は近代科学の幕開けを告げるものとしてあまりにも有名であるが、同様の説を唱えた人が朝鮮にもいたのである。その事実には驚き、関連する研究論文をさがしたところ『朝鮮学報』に掲載された藪内清「李朝学者の地転説」を見つけた。著名な研究者の論考であり期待したが、残念ながら洪大容がコペルニクス説を知った可能性を論じ、高く評価するには当たらないというものであった。ただし、洪大容が持論を展開した『鑿山問答』には言及しておらず、本当のところはどうなのかとそれを読みはじめた。

一八世紀の朝鮮は文芸復興の王といわれた英祖時代であり、実学が盛行した。なかでも、洪大容は自然科学分野に大きな関心を

持ち、自宅に「籠水閣」という私設天文台を設置して天文観測を行ったという。また、燕行使の一行の随員となって北京を訪れた際には、清の国立天文台「欽天監」を訪問、イエズス会士の宣教師・ハルレンシユタイン（劉松齡）、ゴガイスル（鮑友晉）の二人と会見し、その内容を『劉鮑問答』として残している。さらには実用応用問題を中心とした数学書『籌解需用』を著したが、そんな彼が自己の思想を集大成したのが『鑿山問答』であった。

『鑿山問答』は儒学者として型どりの学問を修めた虚子なる人物が、山中で実翁なる巨人と出会い、彼から「道術に惑わされれば世を混乱させる」という戒めを受けた後、改めて「大道の要」とはなにかと問うところから始まる。そして、天文・気象や神仙・風水、さらには人間・万物の根本と社会発展、中国の変遷など様々な問題が論じられる。筋立ての面白さに感心するとともに、すぐにその本領が宇宙論にあることがわかった。そこで、日本における研究状況と『鑿山問答』の検討に基づき、彼の地転説はその宇宙論の一部であることを明らかにした論考を書いた。今から二〇年ほど前のことである。以降、わたしは朝鮮科学史研究に邁進してきた。

まず、自身の朝鮮科学史全般に関する理解を深めるため『わが先祖の誇り』を訳し、『朝鮮の科学と技術』（明石書店、一九九三年）として出版、次に折にふれて書いた朝鮮科学史と関連する評論や書評をまとめた『朝鮮科学文化史へのアプローチ』（明石書店、一九九五年）を出版した。さらに、今後の研究の基本文献を

提供する意図から、南北朝鮮および在日の研究者の論文を集めて『朝鮮科学技術史研究』（二〇〇一年）、『朝鮮近代科学技術史研究』（皓星社、二〇一〇年）を刊行した。手本としたのは人文研から刊行された藪内らによる中国科学史に関する研究報告集である。

同時に、洪大容の無限宇宙論の内容、成立過程、伝統的世界に彼が持ち込んだ新しい考え、朝鮮および世界の宇宙論発展史におけるその意味について追究してきた。その研究成果を『科学史研究』をはじめとする学術雑誌に随時発表してきたが、それらを一つにまとめたものが今秋に思文閣出版から刊行される単著である。

名君といわれた英祖であるが、晩年に諸般の事情から世子を櫃に閉じ込め餓死させるといふ悲劇を生んだ。次代の王となった正祖はその息子であるが、洪大容は彼の教育係を担当している。正祖もまた名君といわれ様々な改革を行ったが、そこには父を死に追いやった者たちへの戒めがあったことは想像に難くない。科学史の面白さは科学者・技術者たちの創意・工夫と斬新な思考方法とともに、その背景にある人間模様にある。はたして洪大容は正祖に何を語り、正祖は何を学び、それは当時の学術にどのような影響を与えたのか？ 洪大容の内面を深く掘りさげ、彼の学問の真髄に迫る、今わたしが課題としていることである。

もし、洪大容の宇宙論を知ることがなかったら朝鮮科学史研究を行うことはなく、関連する書籍を著すこともなかっただろう。わたしにとつて洪大容との出会いは、本当に幸運かつ重大な出来事であった。

（朝鮮大学校教授）

東アジア近現代文学史を夢みて

梁ヤン東ドン
国グク

丁度二〇年前のことである。一九九一年六月六日、東京大学大学院比較文学比較文化研究科の主催で「韓国の詩・日本の詩」と題された小さな講演会が開かれた。演壇に立ったのは、どうしても六〇代半ばには見えない端正で西欧的な外貌の、日本現代詩壇を代表する女流詩人・茨木のり子氏であった。その日の講演は、氏が五〇代の後半から学んできた韓国語で金芝河、黄東圭マドグイなど、韓国現代の主要詩人二人の六二篇を翻訳して綴った『韓国現代詩選』（花神社、一九九〇年）が読売文学賞（第四二回）を受賞したことをうけての記念行事でもあった。十数年間ハングルを勉強してきたとはいえ、現代詩の翻訳には、韓国社会への冷徹な視角と歴史と民衆への考察が必要である。しかし茨木氏は韓国現代詩が持つ様々な深淵を突き詰め、見事な訳詩を生み出したのである。それから一五年が経った二〇〇六年に氏が亡くなられたことを、彼女の死の二年後に知った。かの講演会で原詩の音楽性を実感するために韓国語の朗読も行われたが、金芝河の詩を取り上げる際、男性の声で聞かせてほしいと言われ、急に私が指名された。緊張のせい、早口でしかも呼吸の不一致など、全くしくじったと

思っていたが、詩人は却って「セクシュアルな声ですな」と優しく労ってくださった。その二ヶ月後、青山大学で国際比較文学会（ICLA）東京大会が開かれた際、会場で偶然氏に出会った。挨拶をすると「アーヤンさん」と例の特有の朗らかな声で答えてくださる。記憶力のよさと優しさに驚き、買ったばかりの『韓国現代詩選』にサインを頼むことさえ、忘れてしまった。私は詩人の死を知った夜、不思議な知的欲求に駆られ、いくつかの評論と詩集を読み上げた。そして韓国語で一つの論文を一気に書き上げた。「茨木のり子と韓国——知性と叙情を越えて」と題したこの論文の中で、私は美しい叙情のなかに鋭い知性をまじえ、普通の人々が力を合わせてつくっていく現実世界のユートピアを夢見て、その一方では卑怯でひ弱な現実社会を否定し、すべての非人間的なことに対して決して妥協しない姿勢などを突き詰めた。そして韓国の政治的な状況と結びつけて氏がどういうビジョンを与えていたか、また尹東柱への関心とハングルへの深い愛情、さらに韓国現代詩への翻訳、ひいては自らの詩想の中にハングルを織り込むに至るまでの文学的な交遊の痕跡をまとめてみた。

私は論文をまとめた後、美しい詩人はこの世を去ったが、その文業に、韓国と日本詩壇との関係で、もう一つ大きな足跡が加えられたことにふと気づいた。一九一〇年代半ば、詩壇の大黒柱の一人であった川路柳虹の推薦を受けて曙光詩社の同人として『現代詩歌』を中心に活躍した留学生詩人・朱耀翰ジュヨハンは、韓国の近代詩を切り開いた先駆者となった。朱を強く意識しながら北原白秋主宰の『近代風景』に、二三編の詩を発表した鄭芝容チンシヨクは同志社大学の英文科に在学していたが、韓国へ帰国してからは、モダンイズム詩を先導していった。その二〇年後、鄭芝容を欽慕して同じく同志社大学に留学した尹東柱ユンドンジュは生前に活字化されたことはなかったが、彼が残した多くの詩は日本語に訳されておおいに愛されている。尹の透明で明澄な詩想に魅了された一人が茨木氏であり、その思いを「尹東柱」「尹東柱について」などの流麗な随想録として書き残した。また、彼女は金芝河や洪允淑ホンユンソクなどの韓国を代表する現代詩人とも深く交流していた。これらを考えてみると、今までの

の一国中心の文学史から抜け出て、もっと幅広く東アジア的な視角から捉えても差し支えないような気がする。ここで重要なことは、言うまでもなく文学の受容関係における影響の問題である。

二〇世紀初頭、韓国や中国から多くの若者が日本へ留学し、後に国へ帰ってそれぞれの分野で近代文学や文化を担っていた。ゆえに日本からの影響は至大であったが、それに拒否感を覚える人も少なくないだろう。しかし、文学における影響はその優劣や質を規定する概念ではない。それはむしろ、それぞれの伝統に想像

力と洞察力を喚起することであり、受信者側の柔軟な受容性を表すものでもあって、影響は知的交遊と文化交流の多様な痕跡といえる。もちろん、東アジアの近現代文学史では、対照比較文学や文学思潮の展開や変容、あるいは留学経験を持つ近代文人を中心とした留学の地理誌も書き込むべきである。その意味で近年、大手前大学文化交流研究所が企画された「一九二〇年代の東アジアの文化交流Ⅰ・Ⅱ」は固い基盤を作ったと言える。

韓国でも純粋な日本文学はもとより、日本へ留学した近代作家を中心とした日本の作家との関係についても活発に研究が行われている。最近では日本語で創作活動をしていた留学生作家や芸術家が、当時日本でどう捉えられていたかなどの一種の他者論やボストコロニアリズムの方法論まで取り入れた研究が進んでいる。

私の机上に散らばっているいくつかの本のなかで、金素雲の『朝鮮詩集』と『茨木のり子の家』という二冊の詩集が殷々たる光を帯びている。『朝鮮詩集』に収められている数多くの韓国の近代詩人と北原白秋や萩原朔太郎との文学的な交遊や、また翻訳における政治・文化的な位階秩序と芸術至上主義への憧れとの拮抗、その一方で茨木のり子の普通の人々への呼び掛けがどう位置づけられるか、私が夢見ている文学史にそれぞれ書き込まれていくことを考えるだけで胸にじんときる。東アジア近現代文学史は歴史の上に厳存する対立と葛藤と傷痕とを治癒する一つの近道になるとともに、また、東アジアにおける文学研究のさらなる深化のための狼煙をあげることになるだろう。

(祥明大学校教授)

史料

探訪

46

舍利容器

(MIHOMUSEUM 学芸部長)

片^{かた}山^{やま}寛^{ひろ}明^{あき}

この舍利容器は、銀を鍛造して造られたもので、高さが二八・八センチ、最大幅は一二センチを有する。身には脚付のワイングラス形の上部に内側に反り返る形の口縁部を付けた器を使い、蓋にはこれを逆にした形の器を用いて、全体に波打つ畝状の横文を施している。頂部にはここに付くはずの脚部に代えて野生ヤギの彫像があしらわれており、ゆったりとした弧を描いて尾に届くまでに続いている長大な角が、把手の役割を果たしている。

容器には六ヶ所に銘文が記されており、そこから幾つかの名前が確認されている。作者らしい「ナム」という名前や所蔵者と思われる「ヤグ王カラオスタ」、「インドラヴァルマン王子」などがある。さらに容器の蓋と身に書かれた長い銘文によって、この容器の最後の所有者であったインドラヴァルマン王子が妻とともに創建した仏塔にこれを取めたことがわかる。

容器の形態はタキシラのシルカップ遺跡出土の銀製杯に近似し、酒宴を描いたガンダーラ地方の浮彫の人物が手にしている杯にも似た形態のものが確認されることなどから、本来は舍利容器としてではなく、聖なる儀式に用いられる酒杯として造られたと推定

されており、銘文から本来カラオスタ王のために造られ、後にインドラヴァルマン王子に下賜されたものと考えられている。舍利容器として仏塔に奉納された時期は、同王が紀元六年に奉納したもう一つの舍利容器の銘文との内容の比較によって、紀元前後のことと推察されている。

この舍利容器が奉納された紀元前後といえは、この容器の出土地と推定される西北インドでは大乘仏教運動が盛んに行われていた。仏滅後、僧たちは釈迦の生前の教えに従い、釈迦の遺骨には係わらず、法と戒をよりどころとして寂靜をもとめて修行に励み、釈迦の教えを継承するために、釈迦の言葉を集めて釈迦の記憶を確かめ、その正しい伝承に努めていた。大きな仏典結集は仏滅から紀元前二世紀頃までに四回行われたという。一方で王や商人など、在俗の人々にとっては釈迦という人格を抜きにして仏法を理解することは難しく、人々は釈迦の遺骨や遺品、教祖に係わる遺跡を通じて、教祖を追慕しつづけたのだった。そして紀元前一世紀頃、これらの人々の中から、釈迦の言葉に従って寺や聖地にこもって八正道を行って無明を絶ち、心身を滅して得られる寂靜

の境地（無余涅槃）を求める生前の釈迦仏を知らない僧らに對して、身を灰にし、智を滅して、全くの無に歸する最終目的は、虚無主義的で不完全だと批判する人々が現れたという。大乘仏教の勃興である。

彼らは新たに釈迦が説いたという体裁を持つ經典を造り出し、『維摩經』では維摩居士という、在家でありながら僧侶に劣らぬ深い仏教理解をする人物を生み出し、僧侶たちがこだわっている聖と俗、迷いと悟りが別々のものではないことを語らせて、俗世にありながら仏陀の教えを實踐する菩薩像を描いてみせた。また



「舍利容器」銀製 中央アジア・ガンダーラ地方と推定
MIHOMUSEUM蔵

阿弥陀仏の西方極樂浄土を説いた『觀無量壽經』でも釈迦仏は夫である王を救おうとして、息子の阿闍世王に幽閉された韋提希夫人のためにこれを説き、王族の夫人が救われる様を描き出した。

そしてこの舍利容器が奉納されたのと同じ頃、『法華經』が成立したと考えられている。この経で釈迦仏は、それまで人々の機に応じて四諦や十二因縁を説いて、涅槃の寂靜や阿羅漢の境地を目的のように示してきたがそれは方便であり、仏陀の本當の目的はすべての人々を仏陀にすることで宣言した。釈迦仏が前世で何度も生まれ変わって徳を積んだように、今目の前にいる僧侶も尼僧も、菩薩も王も、はるか前世より徳を積み自分との縁を結びながらここにあるのであり、今後も徳を積み続けてすべてが菩薩となり、いずれ必ず仏陀となると予言する。方便品では仏滅後に舍利を供養し、塔を建て、仏像を造るなどした者はかりか戯れに仏像を描いた童子、これらを供養する者、あるいは合掌のみをし、南無仏と称えるのみの者も仏道を成じると説いた。

舍利容器に記された長文の銘によれば、妻とともにこの舍利容器を奉納したインドラヴァルマン王子は、父母をはじめ、一族が敬い奉られることに加えて、すべての人々が敬い奉られ、すべての人々が涅槃へと導かれることを願っている。これが『法華經』の化城喻品で梵天が宮殿を奉った時に発した「願以此功德、普及一切、我等与衆生、皆共成仏道」という有名な廻向文と共通する精神を感じさせるのは、両者が同じ大乘仏教の土壌で育まれたものであったことを示している。

三館連携特別展

神仏います近江

この秋、300点を超える名品が3つの会場に会い、
近江の歴史の根幹をなす宗教文化に迫る
過去最大規模の展覧会が始まります

信
楽

MIHO MUSEUM

天台仏教への道

—永遠の釈迦を求めて—

9月3日(土)—12月11日(日)

10～17時(入館は16時まで) 月曜休館(祝日の場合は翌平日)

入館料 大人1000円/高・大生800円/小・中生300円

(20名～団体料金各200円引き)

滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷300

TEL.0748-82-3411 <http://miho.jp>

瀬
田

滋賀県立近代美術館

祈りの国、近江の仏像

—古代から中世へ—

9月17日(土)—11月20日(日)

9時30分～17時(入館は16時30分まで) 月曜休館(祝日の場合は翌日)

入館料 一般950円/高・大生650円/小・中生450円

(前売り及び20名以上の団体料金大人750円/高・大生500円/小・中生350円)

滋賀県大津市瀬田南大萱町1740-1(文化ゾーン内) TEL.077-543-2111

<http://www.shiga-kinbi.jp>

大
津

大津市歴史博物館

日吉の神と祭

10月8日(土)—11月23日(日)

9時～17時(入館は16時30分まで)

月曜(祝日の場合は開館)、祝日の翌日(土・日を除く)休館

入館料 大人1000円/高・大生500円/小・中生無料

(前売り及び15名以上の団体料金大人800円/高・大生400円/小・中生無料)

滋賀県大津市御陵町2-2 TEL.077-521-2100

<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

主催：神仏います近江展実行委員会/京都新聞社

神仏います近江展実行委員会事務局 〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷300 MIHO MUSEUM内 TEL.0748-82-3411

ホームページ <http://www.biwako-visitors.jp/shinbutsu>

Twitter http://twitter.com/#!/shinbutsu_ohmi Facebook <http://www.facebook.com/shinbutsu.ohmi>

書評・紹介一覧 6～7月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事 [敬称略]
象徴天皇制の形成と定着 (評)『日本歴史』第757号(小田部雄次)	歴史のなかの天皇陵 (紹)『史学雑誌』第120編第7号(稲田奈津子)	
近世長崎司法制度の研究 (評)『日本歴史』第757号(小山幸伸)	中国五代国家論 (評)『古代文化』第63巻第1号(山根直生)	
西村茂樹研究 (評)『日本史研究』第586号(見城佛治)	日本文学の「女性性」 (紹)『国文学 解釈と鑑賞』第76巻6号(山口直孝)	
中世京都の空間構造と礼節体系 (評)『日本歴史』第757号(石原比伊呂)	いけばなにみる日本文化 (紹)『なごみ』7月号	
御堂関白記全註釈 (記)『古代文化』第63巻第1号(山中裕)	日本古代典籍史料の研究 (紹)週刊読書人 7/22(木本好信)	
太子信仰と天神信仰 (評)『地方史研究』第351号(西海賢二)	藤村庸軒をめぐる人々 (紹)『淡交』7月号	
京都の都市共同体と権力 (評)『地方史研究』第351号(馬部隆弘)	大本山くろ谷 金戒光明寺 宝物総覧 (紹)浄土宗新聞 6/1	
一休派の結集と史的展開の研究 (紹)全国大学国語国文学会ウェブサイト 7/20	京都市新聞 7/5	
	天龍寺文書の研究 (紹)中外日報 6/23	

6月から7月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
近代医療のあけぼの	青柳精一著	1583-6 C3047	4,935	6
いけばなにみる日本文化(2刷)	鈴木榮子著	1557-7 C1076	2,730	6
法然伝承と民間寺院の研究	平祐史著	1534-8 C3021	9,450	6
越境する漱石文学	坂元昌樹・西楨倅・福澤清編	1565-2 C3090	2,940	6
織豊期主要人物居所集成	藤井讓治編	1579-9 C3021	7,140	7
田能村竹田基本画譜	宗像健一編著	1566-9 C1071	29,400	7

6月から7月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
九条家本延喜式	1	1	巻一・二・四・六・七甲・七乙	1535-5 C3321	15,750	7
大手前大学比較文化研究叢書	7	7	一九二〇年代東アジアの文化交流Ⅱ	1584-3 C3090	2,625	7

(表示価格は税5%込)

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.83

2011(平成23)年9月10日発行

発 行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷲草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

▼先日、小社が加入している歴史書懇話会と某書店様との合同研修会を大阪で行いました。本を販売するという仕事は同じでありながら、目線が変わると様々な違いがあることを再確認しました。

普段、直にお客様とお話する機会の多くは学会での販売ですが、研修会では書店という「生」の現場からの反応を教えて頂き、大変勉強になりました。電子書籍の今後が注目される中、リアルな「現場」の熱意を応援できればと思います。(I)

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店(東京都新宿区)

歴史書懇話会連続フェア

「東洋史フェア」9月15日まで

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ・ T E N D O 八文字屋 (山形県天童市)
- ・ 紀伊國屋書店新潟店(新潟県新潟市)
- ・ 今井書店グループセンター店
(島根県松江市)
- ・ ブックデポ書楽(埼玉県さいたま市)
- ・ 芳林堂書店高田馬場店(東京都新宿区)

☆学会出店情報 小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

- 神社史料研究会サマーセミナー(香取神宮)
8/28(日)～29(日)
- 中世都市研究会(鶴見大学)
9/3(土)～4(日)
- 日本社会学会(関西大学千里山キャンパス)
9/17(土)～18(日)
- 日本古文書学会(國學院大学)
9/24(土)～25(日)
- 日本民俗学会(滋賀県立大学)
10/1(土)～2(日)
- 教育史学会(京都大学)
10/1(土)～2(日)
- 日本史研究会(京都女子大学)
10/8(土)～9(日)
- 朝鮮史研究会(立命館大学)
10/22(土)～23(日)
- 中世文学会(天理大学)
11/12(土)～13(日)
- 日本医史学会関西支部総会(大阪市大)
11/13(日)
- 日本仏教総合研究学会(関西大学)
12/10(土)～11(日)

▼石油ストーブの点・消火ですらおっかなびっくりな私。焼畑は粗放な農業と思われがちですが、火の扱いをよく知っているからこそできることです。お二人の話を伺って、便利さを求めて失ってきた「経験知」の重要性を改めて感じました。(須)

▼鹿雪登先生の「古井喜実と中国」が刊行間近です。ときに内外から批判されても自らの政治姿勢を貫き、日中国交回復に尽力した姿には感銘を受けます。現代の政治家さんたちにはぜひ読んでいただきたい一冊です。(M)

▼事務所が移転してはや二か月。東山では鐘の音がよく聴かれる。毎早朝の知恩院の鐘。お盆には珍皇寺の迎鐘。この迎鐘、夜十一時頃でも延々鳴り続け、近所のおばあさんは迷惑そう。しかし何とも風流な騒音だ。(大)

▼昔、賀茂川から引きあげられたお地藏様が、今年のお地藏盆で初出番。開眼供養は？等々大騒ぎ。本当にお地藏さま？はさておき、立派に町内のお地藏様になりました。(江)

▼表紙図版・「大江山絵詞」(部分) 重要文化財・財団法人阪急文化財団所蔵 / 「絵巻 大江山酒呑童子・芦引絵の世界」より

同名の展覧会が、九月一七～二四日、大阪府池田市の逸翁美術館で開催されます。詳細は逸翁美術館ホームページをご覧ください。

たのむらちくでん 田能村竹田 基本画譜

宗像健一編著

〔全二巻〕

図版篇・解説篇

※田能村竹田(安永六年〜天保六年)は資性文雅を好み高才多能、詩歌・文章・書画・茶・香みなどに通暁。池大雅、与謝蕪村のあと、岡田米山人・浦上玉堂より少しくれて登場し、青木木米・頼山陽・浦上春琴・岡田半江らとわが国南画の隆盛期を築いた。

※図版篇には厳選された一四〇点の作品を大型図版で収録。解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。
※田能村竹田研究では他の追隨を許さない編者による作品選別は、今後の研究の基盤となる。

※美術史はもちろん、豊後(大分県)の地誌編纂に携わるなどした竹田の多才にあわせ、煎茶・漢詩・儒学・歴史など広範な研究に大いに益する。

朝日新聞 8/31 夕刊で紹介
「今後の研究の礎」

【7月刊行】



◎ 図版篇 ◎

- 基本作品(カラー58点)
- ・ 作画の変遷を辿るうえで重要な作品
- 補遺Ⅰ(カラー37点)
- ・ その他の重要な作品
- 補遺Ⅱ(モノクロ36点)
- ・ 初期作品を中心に、割愛しがたい作品を過去の刊行書等から複写
- 補遺Ⅲ(モノクロ9点)
- ・ 関連する資料的作品等

◎ 解説篇 ◎

- 総論
- 解説
- ・ 基本作品58点を詳細に解説(作品をモノクロで再掲)
- 題詩等・落款
- ・ 題詩の翻刻と落款を原寸で収録
- 印譜(2色刷)
- ・ 主要印59顆を原寸で収録
- 年譜
- ・ 各事項の出典資料を明記(30頁)

▼B4判変型・総三九八頁
定価二九、四〇〇円

絵巻

大江山酒吞童子・芦引絵の世界

逸翁美術館編

【9月刊行】



今年九月一七日(土)から一二月四日(日)まで行われる同名展の図録を兼ねた書籍。
館所蔵「大江山絵詞」(重文)とサントリ美術館所蔵「酒伝童子絵巻」をそれぞれ全巻カラー掲載し、酒吞童子絵巻の二大系統を対比させる。お伽草子として広く読まれるようになっていった鬼退治の物語とともに、軍記物の絵巻なども収録。
また、僧侶と稚児の恋愛を中心に中世社会を生き活きと描き出した、館所蔵「昔引絵」(重文)などをも含め、逸翁小林一三の絵巻コレクションを一挙公開。

▼A4判・九六頁／定価一、〇五〇円

与謝野晶子と小林一三

逸翁美術館編

【4月刊行】

晶子が一三に贈った「源氏物語礼讃歌」短冊全五四枚をはじめ、晶子と一三の関係を示す一六点を収録。
▼A4判・九四頁／定価一、〇五〇円

茶の湯文化と小林一三

逸翁美術館編

小林一三(逸翁)の世界を、館藏品を中心に、5つのテーマによりオールカラーで紹介。
▼A4判・一四八頁／定価二、〇〇〇円

入門 奈良絵本・絵巻

石川透著



最新研究成果をふまえた「奈良絵本・絵巻の宇宙展」図録。元禄年間に京都で活躍した女性絵師・居初つなが存在を明かした作品も収載。広範な奈良絵本・絵巻の世界をカラー写真で紹介。
▼B5判・一二六頁／定価二、一〇〇円

太子信仰と天神信仰

武田佐知子編

信仰と表現の位相

各専門分野の研究者による、両信仰に関わる美術史、文学史、宗教史、芸能史の研究を集成。時代とともに変化する信仰の形態や、それに付随するイメージの付与、宗派や地域を越えて多面的に利用されるそれぞれの信仰の進化形について明かす。
▼A5判・二三四頁／定価六、八二五円

源氏物語 千年のかがやき

国文学研究資料館編

新出の国文学研究資料館蔵『源氏物語团扇画帖』全五四枚をカラーで掲載、詳細な解説を付す。源氏物語が千年間どのように享受されてきたのか、豊富なカラー図版で紹介。
▼A4判・一六八頁／定価一、九九五円

風俗絵画の文化学 都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

中世から近世における風俗絵画のメディア性に着目し、そこに描かれなくなったものの持つ意味や享受者の視点、都の社会における聖と俗の姿、風俗絵画に表された芝居空間や行事のかたちの変化など様々な視点からアプローチする。
▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

近世京焼の研究

岡佳子著

〔3月刊行〕

近世の京焼の窯業的な変遷を文献史料と出土資料から明かし、そこに京焼の名工たちの生涯と作品を位置づけ、その特質を明確にした。名工たちの陶業を産業としてとらえ、技術の系譜や産業的な展開、流通・市場の動向などの視点から、京焼陶工の実態から京焼の通史までを見直した一書。

▼A5判・四三〇頁／定価六、六一五円



松花堂昭乗と 瀧本流の展開

山口恭子著

〔3月刊行〕

瀧本流の書について造型的な面のみならず、昭乗の著述した文芸作品、瀧本流の法帖など、文献資料や版本に対する細やかな検討を行うことにより、近世の書道史、出版史、文化史など広範な研究分野に新しい知見を提供する。

▼A5判・三五六頁／定価九、〇三〇円



いけばなにみる日本文化

鈴木榮子著

明かされた花の歴史

『お稽古事』としてとらえられがちで、外形の歴史にしか注目されてこなかったいけばな。その精神に初めて学問的な光をあて、日本文化という大きな枠組みの中でとらえる。外国人向けの「英語でいけばな」教室を主宰する著者が、いけばなに継承される精神を探る。図版多数掲載。

▼四六判・三五八頁／定価二、七三〇円



船簞笥の研究

小泉和子著

〔5月刊行〕

近世海運において船乗り達が船内に持ち込ん で使っていた収納家具、船簞笥。本書はその成立から終息までを歴史的に考察し、デザイン の形成を検証の上、その本質を明らかにする。様式史としてではなく、船簞笥自体を歴史を語る史料として試みた意欲的な一書。口絵カラー4頁・モノクロ4頁ほか本文挿入図版多数

▼A5判・四一〇頁／定価六、三〇〇円



文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

近代奈良において個人により形成され、多様な史料の「かたまり」である水木コレクションを主な分析の素材とし、日本史学・考古学・建築史学・国文学・美術史学・地理学・社会言語学等にわたる学際的な一書。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円



応用美術思想導入の歴史

天貝義教著

ウイーン博参同より意匠条例制定まで

「博覧「伝習」勸業」を目的としたウイーン万国博覧会への日本初参加から「デザインの方法」である意匠条例が制定されるまで、応用美術思想がいかに学習され、明治期の美術・工芸界において指導的役割を果たしていったかを明らかにする。

▼A5判・四一〇頁／定価七、八七五円



典籍と史料

龍谷大学仏教文化研究叢書28

【9月刊行予定】

大取一馬編
一九六一(昭和三六)年、親鸞聖人大遠忌記念事業の一環として開設された、龍谷大学仏教文化研究所の研究者陣による、真宗学・仏教学・哲学・教育学・史学・文学等の分野にまたがる広汎な仏教文化の最新研究成果。

◆内容(執筆者50音順)

岩井宏子 和歌における「和漢朗詠集」の受容／内田誠一 福井崇蘭館旧蔵・光格天皇宸翰尺牘について／内田美由紀「伊勢物語」業平時代の成立について／大取一馬 後鳥羽院の新古今撰集について／小田剛式子内親王歌の本質／加美甲多「沙石集」諸本異同から見た梵葬本文の特性／日下幸男 藤門周斎「法樂寺奉納百首和歌」について／楠淳登 龍谷大学図書館所蔵「興福寺奏達状」について／後藤康夫 禿氏文庫本「因明十題」について／小山順子 後柏原天皇の三代集仮名句題について／酒井茂幸 龜山殿七百首 伝本考 統／鈴木徳男「統詞花集」考／關根真隆 古代尺よりみた法隆寺遺宝／玉木興慈「教行信証」信卷「逆誘撰取歌」について 田村正彦「地獄の馬」の表現史／新倉和文 解説上人貞慶と同法達との「契約」 浜畑圭吾 西光と地藏菩薩／日比野浩信「頭注密勸」古筆切管見 原田信之 上杉謙信祈願所新義真言宗長福寺の唱導資料／万波寿子「妙好人伝」と「統妙好人伝」の出版と流通／三浦俊介 絵仏師「宅間法眼」の画業と説話／三輪正胤 神道歌学の成立／安井重雄 社頭歌合の歌題構成と位署

おおとり・かずま：一九四七年生。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。現在、龍谷大学文学部教授。

▼A5判・六八〇頁／定価八、九二五円

中世近世和歌文芸論集

龍谷叢書15

日下幸男編

編者の華甲記念として、関西を中心に活動する近世和歌輪読会による初の論文集。現在の中世・近世の和歌研究に一石を投じる意欲作一七篇。

▼A5判・四三二頁／定価六、三〇〇円



日本古典随筆の研究と資料

龍谷大学仏教文化研究叢書19

龍谷大学図書館が所蔵している、日本の古典随筆に関する伝写本を悉皆調査した研究プロジェクト「古典随筆伝写本の研究」の成果。

▼A5判・四八二頁／定価七、五六〇円

中古中世和歌文学論叢

龍谷大学仏教文化研究叢書9

「四十人集」(龍谷大学図書館蔵写字台文庫旧蔵)を調査・研究する課程で見出された様々なテーマによる共同論集。

▼A5判・三〇〇頁／定価八、一九〇円

中世の文学と学問

龍谷大学仏教文化研究叢書15

中世の文学や学問の特質の一端を、「中世の学問」「中世の文学」「中世の作品の享受とその展開」の三章に分けて考察・解明した共同論集。

▼A5判・四九二頁／定価八、八二〇円

『狭衣物語』享受史論究

川崎佐知子著

『源氏物語』に並称された平安朝後期物語の傑作『狭衣物語』の受容の様相を文献学的見地から徹底的に分析検証。

▼A5判・六四〇頁／定価二二、六〇〇円

禁裏本歌書の蔵書史的研究

酒井茂幸著

禁裏本の総体を蔵書群として捉え、その伝来の歴史を跡付ける。中世後期以降、歴代天皇がどのような歌書を求め、書写・収蔵していったかを解明。

▼A5判・三四四頁／定価五、八八〇円

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式(全五巻)

第一回配本(一) 巻一・二・四・六・七甲・七乙
 (7月刊行)

▼A5判・四六〇頁／定価一五、七五〇円

本書の特色

- ・東京国立博物館所蔵の国宝・九条家本延喜式を、紙背文書も含めて写真版で影印出版
- ・朱書きがある箇所は二色刷とした
- ・紙背文書には新撮の高精細画像を使用
- ・第五回配本に九条家本延喜式の解説と紙背文書全点の翻刻を付す
- ・写真版に延喜式の条文番号・項目頭注を付し、各巻末に項目索引を記載した
- ・紙背は横長で掲載し、できるだけ一文書を二頁でみる事ができるようにトリミングを工夫した

続刊 ▼平均五〇〇頁・予価(各)一五、七五〇円

(一) 巻八(十一)

平成三十一年一月刊行

(二) 巻十二・十三・十五・十六・二十(二十二)

(三) 巻十三・二十三・二十五・十六・二十(二十二)

(四) 巻二十六(三十一)

(五) 巻三十二・三十三・三十八・三十九・四十二

平成三十四年 三月刊行

編集委員 島谷弘幸 (編集委員長・東京国立博物館)

高橋裕次 (東京国立博物館)

田良鳥哲 (東京国立博物館)

富坂賢 (東京国立博物館)

田島公 (東京大学史料編纂所)

月本雅幸 (東京大学人文・社会科学研究所)

吉岡真之 (東京大学史料編纂所)

続刊予定

国宝 元暦校本万葉集

国宝 元永本古今和歌集

国宝 寛平御時后宮歌合

国宝 三宝絵詞

国宝 群書治要

仁明朝史の研究 承和転換期とその周辺

角田文衛監修・古代学協会編

仁明朝史研究会の研究成果を元に、様々な分野・視点から仁明朝期の画期性を解き明かす論文集。

▼A5判・三五六頁／定価七、三五〇円

日本古代典籍史料の研究

(3月刊行)

鹿内浩胤著

史書・法制史料・儀式書・部類記など歴史学の土台をなす日本古代史の基本史料を対象に、原撰本へ如何にして接近するか、伝来論的アプローチを中心に「文献学的研究」と「書誌学的研究」の二部構成で研究の方法論を提示。

▼A5判・三七六頁／定価七、〇三五円

安祥寺資財帳

京都大学史料叢書17

京都大学文学部日本史研究室編

巻首から巻尾まで備わった貴重な9世紀の資財帳史料の京都大学蔵本を影印(写真版)で収録。

▼A5判・一七六頁／定価五、七七五円

奈良朝人物列伝 『続日本紀』葬卒伝の検討

林陸朗著

『続日本紀』収録の全54名の葬卒伝をとりあげ現代語訳・訓読・原文・語句解説・考察で構成。特色ある54の生きざまから、権謀うずまく奈良朝政治のうら側が見えてくる。

▼A5判・四六八頁／定価七、三五〇円

歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

各時代に陵墓がどうあり、社会のなかでどのように変遷してきたのか、考古・古代・中世・近世・近代における陵墓の歴史をやさしく説く。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

天龍寺文書の研究

原田正俊編

〔5月刊行〕

第一部には鎌倉時代、慶長五年の中世天龍寺関係文書および関連諸塔頭文書を翻刻・掲載、第二部には研究編として解説・論考を収録する。仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会経済史研究に必須の古文書群。

▼A5判・七一六頁／定価一四、七〇〇円

鹿王院文書の研究

鹿王院文書研究会編

京都嵯峨の鹿王院に伝来する古文書を集成、翻刻。あわせて解題・研究篇を付す。【執筆者】地主智彦・原田正俊・仁木宏・玉城玲子・藤田励夫・西村幸信・滝沢幸恵・伊藤真昭・矢内一磨

▼A5判・五三〇頁／定価一三、六五〇円

京都の都市共同体と権力

仁木宏著

思文閣史学叢書

中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなかから町（ちよう）の成立を読み解く。中近世移行期における自治、共同体、権力の葛藤を正面から見すえ、都市の本質を具体的に、理論的に分析した一書。

▼A5判・三三二頁／定価六、六一五円

中世京都の空間構造と礼節体系

桃崎有一郎著

貴人と牛車ですれ違う場合の正しい作法は？参内するときはどこで牛車を降りればよいのか？中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。

▼A5判・五八四頁／定価七、五六〇円

中世前期女性院宮の研究

山田彩起子著

院政・鎌倉期における女性院宮（女院・二后）の多様な存在形態を様々な視点から分析。国母の存在形態の多様性と王家における役割・位置付けを検証し、摂関家出身の女性院宮の摂関家における独自の役割の大きさを論証する。

▼A5判・三二〇頁／定価五、八八〇円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

後鳥羽天皇（上皇）が課せられた政治課題と政策理念が、公事と宗教儀礼の中に具現しているとする視点から、それらが果たした政治的役割を個別具体的に検証し、多面的な視点に立った後鳥羽理解、政治史叙述を企図する。

▼A5判・三二八頁／定価六、三〇〇円

中世史料学叢論

藤本孝一著

永年史料学の現場で調査・研究に携わってきた著者が、四十年の研究成果をまとめた一書。古文书学を中心にしながら、平安時代の政治・社会・文化から、中世・近世の史料考証におよぶ論考。

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

中世蹴鞠史の研究

鞠会を中心に

稲垣弘明著

室町期以降の蹴鞠会の挙行形態の歴史を体系的に論じた一書。新興武家層を参会者として加えた場より遊興性を加味しながら変容し、「故実」に代わって「新儀」が定着すること、それが近世の家元制度の萌芽と認められることなどを明らかにした。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、七七五円

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会編

〔6月刊行〕

日本の古文書を代表する史料群であり、中世の基本史料である東寺文書。東寺文書に魅せられた中世史研究者により、一九九四年以降続けられた東寺文書研究会での研究成果の第二弾。研究会の報告を基礎に最新の成果を披露した十九篇。

▼A5判・六五四頁／定価一一、五五〇円

東寺百合文書

京都府立総合資料館編

第9巻〔9月刊行予定〕

〔既刊8冊〕

東寺百合文書とは、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である(平成九年国宝に指定)。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

▼A5判・平均四五〇頁／定価(各)九、九七五円

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

南北朝時代の寺誌である『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの豊富な史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。本来の保管形態を復元し、伝来を確定して位置付けをしながら。

▼A5判・六三八頁／定価一一、六〇〇円

南都寺院文書の世界

勝山清次編

東大寺宝珠院(法華堂文書・宝珠院文書)と興福寺一乗院坊官二条家(一乗院文書・一乗院御用日記)に伝来した文書の三年間に渡る調査・研究の成果をまとめた一書。

▼A5判・三五〇頁／定価六、〇九〇円

戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗著

〔4月刊行〕

戦国期における常陸国佐竹氏の考察を通して、東国に存在した政治権力の特質を明らかにする。一族衆や国衆等の活動、地域社会との関わりや地域編成について、佐竹氏が発給した「知行充行状」・秋田藩家蔵文書等の史料を通じて考察。

▼A5判・三〇四頁／定価六、〇九〇円

戦国大名武田氏の権力構造

丸島和洋著

〔3月刊行〕

甲斐武田氏を分析対象とし、家中を代表して他大名との外交を担った「取次」に着目。領国支配における意思伝達経路の検討とあわせて、大名権力の中枢を構成する家臣や、大名と家臣の関係について見つめ直し、戦国大名の権力構造を明らかにする。

▼A5判・四三〇頁／定価八、九二五円

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

一休没後も存続した一休派の結衆とその史的展開を解明することで、中世末期の寺院研究史上の欠如を埋める。一休の印可、法嗣否定による法統断絶の危機、門派結衆の軸としての一休塔所での評議、門派での祖師忌法会を第一部でとりあげ、大徳寺復興や在俗信仰者の結衆の問題を第二部で扱う。

▼A5判・三七〇頁／定価八、一九〇円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

〔4月刊行〕

奥州と関東を主に、戦国期以降の仏教・神道・修験道・陰陽道等と地域社会とのかわりを、東照宮や寛永寺を中心とした幕府権威をも視野にいれて考察。

▼A5判・二三八〇頁／定価八、一九〇円

中世長崎の基礎的研究

外山幹夫著

〔10月刊行予定〕

中世長崎、特に肥前国西南部の松浦郡・高来郡・彼杵郡に着目し、松浦氏・有馬氏などの在地武士団の成立・発展、領国支配の実態や南蛮貿易の推移について論じ、その独自性を明かす。

〔内容〕

- 第一部 肥前国松浦郡
 - 第一章 松浦氏の出自とその党的性格
 - 出自と発展／松浦党の性格／党の性格と鎌倉幕府
 - 第二章 松浦党の一揆契諾状と押書・契約状
 - 党の拡大と上・下松浦党／一揆契諾状の作成 ほか
 - 第三章 松浦氏の領国支配
 - 戦国大名への過程／戦国大名としての松浦氏 ほか
 - 第二部 肥前国高来郡
 - 第一章 肥前国高来東郷・高来西郷と高来一揆
 - 肥前国高来東郷・高来西郷の成立／高来一揆の性格
 - 第二章 有馬氏の領国支配
 - 有馬氏発展の契機／五段階の推移／領国の支配 ほか
 - 第三部 肥前国彼杵郡
 - 第一章 平安末・鎌倉期の長崎
 - 莊園公領制の成立とその推移／武士の登場とその活動 ほか
 - 第二章 南北朝・室町期の長崎
 - 動乱の勃発と福田氏の活動／深堀・矢上両氏の活動 ほか
 - 第三章 戦国期の長崎
 - 長崎氏と長崎港／六丁町の成立／長崎をめぐる諸権力
- ▼A5判／四一〇頁／定価七、八七五円
- とやま・みきお：一九三二年生。長崎大学名誉教授、長崎市史編さん委員会委員長。

近世長崎・対外関係史料

太田勝也編

近世の長崎町方や対外関係に関する史料4点（長崎御役所留・長崎諸事覚書・長崎記・長崎日記）を活字化。詳細な注と解題を付す。

▼A5判・七二四頁／定価一六、八〇〇円

鎖国時代長崎貿易史の研究

太田勝也著

思文閣史学叢書

寛永鎖国の成立期から江戸時代中期の正徳新例にいたるまで、幕府の貿易政策を徹底追究。

▼A5判・六六四頁／定価一四、四九〇円

近世日蘭貿易史の研究

鈴木康子著

思文閣史学叢書

国内史料を詳細に検討しつつ、オランダ東インド会社によるアジア貿易史料や日本商館史料を紹介し、相互に補完することにより、日本とアジア・ヨーロッパ市場の動向を、長崎貿易を接点としてとらえた国際的研究。

▼A5判・四八〇頁／定価一〇、〇八〇円

長崎奉行の研究

鈴木康子著

17世紀後期から18世紀中期の約一〇〇年間の、長崎奉行の職掌や幕府内における長崎奉行の位置づけの変化、そして長崎奉行自体の特質が変質してゆく状況を解明。

▼A5判・四二〇頁／定価六、五一〇円

近世長崎司法制度の研究

安高啓明著

長崎奉行の司法的権限を明らかにするとともに、近世都市長崎の司法体制を解明。

▼A5判・五〇四頁／定価五、九八五円

織豊期主要人物居所集成

いどころ

藤井讓治編

織豊期を生きた政治的主要人物の移りゆく居所を通時的に追った研究者必携の書。

居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全であり、公にされることもきわめて少なかった。本書は、多くの研究者が複数の人物を取り上げ、居所情報を複眼的に確定した成果を一覧に供する。

・ 政権の中心人物、政権中枢の人物、有力大名、有力武将、僧侶・文人、公家、政権に関わる女性たち、総勢25名を収録。

・ 各章は「略歴」「居所と行動」で構成され、現在知りうる限りの居所情報を編年で掲載。

・ 辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

《収録人物一覧》

織田信長	豊臣秀吉	徳川家康	足利義昭
柴田勝家	丹羽長秀	明智光秀	細川藤孝
毛利輝元	小早川隆景	上杉景勝	伊達政宗
浅野長政	福島正則	片桐且元	近衛前久
西笑承兌	大政所	浅井茶々	孝藏主
			北政所(高台院)

《執筆者》(五十音順)

相田文三(虎屋文庫研究主事)／穴井綾香(九州大学大学院特別研究者)／尾下成敏(京都大学等非常勤講師)／柚田善雄(大手前大学教授)／中野等(九州大学大学院教授)／早島大祐(京都女子大学准教授)／福田千鶴(九州産業大学教授)／藤井讓治(京都大学大学院教授)／藤田恒春／堀新(立女子大学教授)／松澤克行(東京大学史料編纂所助教)

【7月刊行】

▼B5判・四七六頁／定価七、一四〇円

たとえば、天正10年6月2日 本能寺の変、そのとき・・・

織田信長——京都



豊臣秀吉——備中高松



徳川家康——堺



柴田勝家——魚津



※ []内は組見本 (70%縮小)

一八世紀日本の

文化状況と国際環境

笠谷和比古編

〔8月刊行〕

日本の18世紀社会は、儒学・文学・博物学・蘭学等各分野において多くの成果を生み出し、近代化に多大な影響を与えた。それはいかんして形成され、どのような影響を受けつつ、展開したのか。多角的にアプローチした国際日本文化研究センターの共同研究成果。

— 内容 —

〔序論〕笠谷和比古 ◆一八世紀日本の「知」的革命 [Intellectual Revolution] (思潮) 宮崎修多 ◆江戸中期における擬古主義の流行に関する臆見 / 竹村英二 ◆太宰春臺における古文の「體」「法」重視 / 前田勉 ◆一八世紀日本の新思潮 / クレインス、フレデリック ◆蘭方医が受容した一八世紀の西洋医療 / 松山壽一 ◆昌益とシェリング / 和田光俊 ◆享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入 / 小林龍彦 ◆漢訳西洋曆算書と『天学雜録』(経済と社会) 長谷川成一 ◆一八世紀新興問屋商人の広域的活動とネットワーク / 平井晶子 ◆東北農村における家の歴史人口学的分析 / 藤實久美子 ◆江戸書物問屋の仲間株について / ブルチョウ、ヘルベルト ◆江戸時代の日本人は日本をどう発見したか [文化の諸相] 武内恵美子 ◆熊沢蕃山の楽思想と一八世紀への影響 / 小川善帆 ◆一八世紀のいけ花 / 森田登代子 ◆大嘗会再興と庶民の意識 / 魚住孝至 ◆一八世紀における武術文化の再編成 / 郡司健 ◆享保期の異国船対策と長州藩における大砲技術の継承 [国際交流] 武井協三 ◆歌舞伎と琉球 / 中国 / 真栄平房昭 ◆琉球の中国貿易と輸入品 / 平木實 ◆一八世紀朝鮮国の儒学界とそれがみた日本の儒学 / 高橋博巳 ◆ソウルに伝えられた江戸文人の詩文 / 岩下哲典 ◆一八世紀 / 一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容 / 佐野真由子 ◆引き継がれた外交儀礼

かさや・かずひこ : 京都大学大学院文学研究科博士課程修了 (国史学)。
現在、国際日本文化研究センター教授。

▼ A5判・五八二頁 / 定価八、九二五円

東アジアの本草と博物学の世界

山田慶兒編

〔全2冊〕

18世紀、西洋の大航海時代と植民政策、日本の幕府・諸藩の殖産政策と外国貿易により、日本で遭遇した博物学と本草学。それらにおける知的冒険の展開を、学問・産業・芸術のような分野への影響をも含めて、多角的に考察した21篇。国際日本文化研究センターでの共同研究。

▼ A5判・各三七〇頁 / 定価(各)七、八七五円

本草学と洋学

小野蘭山学統の研究

遠藤正治著

日本本草学の頂点、小野蘭山の学統を考察の対象にし、洋学の影響を受け国際的視野を備えた博物学的な本草研究の実態を探り、わが国最初の近代的植物図譜『草木図説』誕生の環境を明らかにする。

▼ A5判・四〇〇頁 / 定価七、五六〇円

牧野標本館所蔵の

シーボルトコレクシヨン

加藤信重著

東京都立大学牧野標本館のコレクシヨンを約10年間にわたり精査した成果。

▼ A5判・二九四頁 / 定価五、六七〇円

シーボルトが蒐集したシダ標本

加藤信重著

オランダ国立植物学標本館ライデン大学分館に所蔵されている、シーボルトコレクシヨンの約千点のシダ標本を、20年にわたり調査した成果。豊富な図版に加え、標本六四二点・一〇〇九カットのカラー画像を収録したDVD付。

▼ A5判・三八四頁 / 定価七、三五〇円

朝鮮科学史における近世

洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論

任正赫著（朝鮮大学理工学部教授）

18世紀朝鮮において、カントとはほぼ同時期に宇宙の構造と生成を論じた学者、洪大容（一七三二～九三）。洪は地動説を契機として、その著作『磬山問答』で無限宇宙論を展開、朝鮮科学史に多大な影響を与えた。本書は、洪が展開した無限宇宙論とはどのようなものか、それが朝鮮科学史においてどのような位置を占めているのか、一八世紀の自然科学でどのように位置づけられるのかを明らかにする。

- 第1章 科学史における近世―朝鮮と日本の比較検討―
- 第2章 学としての朝鮮実学の形成について
- 第3章 湛軒・洪大容の地転説と『磬山問答』
- 第4章 「天円地方」説から無限宇宙論へ

―朝鮮における独自の宇宙論の発展とその終焉―
第5章 朝鮮前期における気一元論
おおよそ象数学的宇宙論の展開について

第6章 カント『天界の一般自然史と理論』の検討と
その科学史的評価

第7章 志筑忠雄『混沌分判図説』の検討とその科学史的評価
付録 『磬山問答』―原文と訳文―

【9月刊行】

▼A5判・三〇〇頁／定価六、三〇〇円

中国における

妊娠・胎発生論の歴史

中村禎里著

中国文化およびインド仏教における妊娠・胎発生論の歴史を通史的に叙述。生から死に移る過程や死観に集中している日本の生命観の研究に一石を投じる。

▼四六判・二五六頁／定価二、九四〇円

絶対透明の探求

尾鍋智子著

遠藤高璟著『写法新術』の研究

18世紀後半から幕末にかけての視覚論についての時代状況、遠藤の知的交流とその思想を論じた上で、『写法新術』の内容を分析し、遠藤の倫理観、写法の理論と視覚論の関係に注目して遠藤の視覚論を明かす。

▼A5判・三一〇頁／定価六、〇九〇円

佐久間象山と科学技術

東徹著

象山は本当に科学技術に関わる知識を有していたのか、といった象山の「知識」と「実践」をめぐる問題について具体的に分析し、幕末における科学技術の受容と水準を解明する。

▼A5判・二八三頁／定価七、九八〇円

技術と文明

日本産業技術史学会編

【既刊31冊】

日本産業技術史学会は、産業研究の各分野、経済学、人類学、日本史、工学等の広範囲の専門家による学際的交流の下で、産業技術史研究の基礎確立を目指す。本誌はその研究発表の場である。

▼B5判・平均一〇〇頁①～⑨・⑰～⑳ 定価(各)二、一〇〇円
⑩～⑱ 定価(各)二、〇三九円

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

「日本の近代」の理解において不可欠でありながら、従来必ずしも系統的・組織的に実施されてこなかった日本の産業技術の変遷を23の大項目に分け、関連項目を34の小項目としてとりあげた「読む事典」。

▼B5判・五五〇頁／定価二二、六〇〇円

焼畑の環境学—いま焼畑とは

〔10月刊行予定〕

佐藤洋一郎監修／原田信男・鞍田崇編

●目次●

総説 佐藤洋一郎総合地球環境学研究所副所長・教授

I 焼畑の原像と衣食住

縄文残像

小山修三(国立民族学博物館名誉教授・吹田市立博物館館長) 織維植物栽培における火耕

平田尚子(かとうし工藝博物館学芸補助員)

飯田辰彦(フシフイグン)作家

椎葉の焼畑と食文化

茅茸き民家を支えるヨシ原の火入れ 大沼正寛(東北文化学園大学准教授)

II 焼畑像をめぐる

会津農書からみる火耕

近世農政家の焼畑観

近代林学と焼畑

新しい農学授業と地域興しの連携

「コラム1」再録 山焼きの民俗思想

III 日本と周辺の焼畑

蝦夷地における近世アイヌの農耕

カブと焼畑

四国山地の限界集落における焼畑と文化環境

沖縄における焼畑

台湾原住民における焼畑

「コラム2」再録 昭和十八年の山口弥一郎の牛虻野調査に関して

IV アジアとアフリカの焼畑	南九州とラオス北部の竹の焼畑	川野和昭(鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸員)
ラオス北部地域にみる焼畑の終焉とイネ遺伝資源の焼失	武藤千秋(京都大学農学研究所技術補佐員)・佐藤雅志(東北大学准教授)	アフリカから焼畑を再考する
登って枝を打つか、地上で切り倒すか	岡原介(東北文化学園大学教授)	養分動態からみた焼畑の地域比較論
V 史料論	中日火耕・焼畑史料考	田中壮木(高知大学准教授)
白山麓一ハケ村とむし関係史料について	原田信男	
VI 附録DVD	白山麓一ハケ村材絵図集	山本智代(錦城学園高等学校教諭)
焼畑関係文献目録	原田信男・鞍田崇(総合地球環境学研究所准教授)	山本智代
あごがき	江頭宏旨・米家素作・原田信男	

焼畑は本当に環境破壊の要因なのか……。歴史・地理・民俗・農学それぞれの観点から、アジア・アフリカ各地で伝統的に行われてきた焼畑の実態を報告。先人の経験知の宝庫ともいっべき焼畑を検証することによって、未来の農業へ新しい知見を提示し、農業と環境、ひいては人と自然の関係を問い直す。総合地球環境学研究所で行われた「プロジェクト」の研究成果。



宮崎県椎葉村の火入れ



ザンビア北東部・パンバの樹上伐採

▼A5判・六〇〇頁 定価九、四五〇円

地域開発と村落景観の

歴史的展開

原田信男 国士館大学教授編

多摩川中流域を中心に

関東平野西部の多摩川中流域をフィールドに、開発と景観という観点から、地球環境の変遷を問う人間の営みの歴史をたどる。豊富な考古遺跡・遺物にくわえ、村絵図・地方文書などの文献史料を手がかりとし、旧石器時代から前近代にわたって通史的に論じる。20年におよぶ年月をかけ行われた共同研究の成果。

日野・八王子地域とその周辺の地形

久保純子

第Ⅱ部

先史・古代の通史的展望

原田信男

先史時代における日野・八王子地区の開発と景観

上敷順久

古代における集落と谷戸の開発

有村由美

古代における沖積地の開発と景観
— 八王子石川天野遺跡の事例から —

有村由美

第Ⅰ部

中世・近世の通史的展望

原田信男

中世・近世における丘陵部の開発と景観

梶原 勝

中世・近世における沖積地の開発と景観
— 八王子市宇津木台遺跡群を中心に —

梶原 勝

近世中・後期における低地部の開発と景観
— 船木田荘と多西郡三郷 —

原田信男

近世中・後期における台地部新田開発の様相

井上 潤

近世における開発と景観の諸相

原田信男

近世における丘陵部の村落景観と村落景観
— 石川村の天正検地とその後 —

酒井麻子

近世の日野・八王子地域における耕地開発と宗教施設
— 飯泉今日子 谷澤美香

飯泉今日子

近世の日野・八王子地域における焼畑の位置
— 山本智代

山本智代

【3月刊行】

▼A5判・四八六頁／定価九、四五〇円

中近世農業史の再解釈

伏見元嘉 郷土史研究者・伊予史談会所属著 『清良記』の研究

戦国末期伊予の軍記『清良記』全30巻を分析。その著者および成立年代を確定し、日本最古の農書とされる第7巻「親民鑑月集」の位置づけを明かす。近世農業の始まりとしての農書という定説をくつがえし、中世農業の最終段階をはじめて詳説したと位置づけ直す。

第Ⅰ部 「軍記」の解釈

第一章 「清良記」をめぐる

第二章 「軍記」「清良記」の検証

第三章 軍記の検証からみえるもの

第四章 「第七巻」の検証

第Ⅱ部 農書の解釈

第一章 「第七巻」いわゆる農書としての疑義

第二章 圖持制度と「本百姓」の成立

第三章 中世前期の営農と

『清良記』の位置づけ

第Ⅲ部 「農業史」再見

第一章 「水田稲作」の再見

第二章 中世・近世前期「農術」の展開

終章 農書としての『清良記』研究の意義

【6月刊行】

▼A5判・四一六頁／定価八、一九〇円

近世の環境と開発

根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編

江戸時代の現実に沿って、村落・河川・山野・鉱山を題材に、環境と開発の問題について改めて問い直す論文集。各執筆者が研究発表と討論を重ねた研究会の成果。

▼A5判・三六六頁／定価七、八七五円

中世村落の景観と生活

原田信男著 関東平野東部を中心として 思文閣史学叢書

現地調査にもつぎ、地形や伝承、中世・近世文書等の豊富な資料、隣接諸科学も援用して、いくつかの典型的な中世村落の事例復元を試み、総合的かつ具体的に考察。

▼A5判・六四〇頁／定価一一、三四〇円

ふるいよしみ 古井喜実と中国

鹿雪瑩著

日中国交正常化への道

一九七二年九月二九日、訪中した田中角栄と周恩来両首相の「日中共同声明」により、日中国交正常化が実現した。
本書は、国交正常化に大きな役割を果たしながら、これまで十分な研究がなされてこなかった古井喜実（一九〇三〜九五）に注目。
未公開資料を含む「古井喜実文書」ほか日中の資料を駆使しながら、古井ら自民党内親中派による国交正常化への軌跡、交渉の裏側を検証する。

◇内容◇

序

松尾尊兌

第1部 自民党内親中派の結集とLT貿易協定の成立

1 官界から政界へ

2 「自主外交」と対中政策

3 一九五九年の中国訪問

4 自民党内親中派の結集と古井喜実

5 LT貿易協定の成立と古井喜実

第2部 古井喜実と日中LT・MT貿易交渉

6 古井喜実と一九六八年の日中LT貿易交渉

7 薄水の日中覚書貿易交渉

8 厳冬の時代

補論 冬の後に春が来る

第3部 古井喜実と日中国交正常化

9 高まる日中国交正常化の気運と自民党内親中派

10 日中国交正常化と古井喜実

ろく・せつえい：一九七五年中国山東省生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。日本学術振興会外国人特別研究員。

【10月刊行予定】

▼A5判・三〇〇頁／定価三、九九〇円

象徴天皇制の形成と定着

富永望著

象徴天皇制は新憲法の運用の積み重ねによって形成されたことを実証する、気鋭の書。

▼A5判・三一六頁／定価五、〇四〇円

日本の朝鮮・台湾支配と

松田利彦・やまだあつし編

植民地官僚

近代日本の朝鮮・台湾支配を現地で担った「植民地官僚」に着目し、日本の植民地支配を考察する。

▼A5判・七五六頁／定価一三、六五〇円

近代日本の軍部と政治

永井和著

「戦前の内閣」をとりあげ、「軍人の内閣」というフィルターを通して内閣史に新たな光をあてる。

▼A5判・四五〇頁／定価九、〇三〇円

日中戦争から世界戦争へ

永井和著

華北に利権を求める日本が、イギリス・アメリカ・ソ連を相手にしてどのような対応をしたのか。日本が世界戦争への道を歩んでゆく姿を明らかにする。

▼A5判・五一六頁／定価七、九八〇円

日中戦争についての歴史的考察

明石岩雄著

日中戦争の全面化は、太平洋戦争への決定的転換点であった。日中戦争の原因について歴史学から考察する。

▼A5判・三三二頁／定価五、七七五円

近代日本と地域振興 京都府の近代

高久嶺之介著

〔3月刊行〕

特定テーマを取り上げ地域振興の視点から考察。フィールドワークの成果や、政治行政史と社会史を組み合わせることで、地域社会の姿をつぶさに描出。

▼A5判・三六四頁／定価六、八二五円

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

京都府知事に就任した北垣国道の明治14、34年の日記。明治期地方官の実情が記され、中央政治史や地方自治・土木史・北海道史研究の進展に寄与する。

▼A5判・六五二頁／定価一〇、二九〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

教多く発生しながら体系的な研究がされてこなかった不敬事件を、明治期について網羅。豊富な実例を整理・検討することで明治国家の特質を考察。

▼B5判・五七六頁／定価一三、六五〇円

森有礼における国民的主体の創出

長谷川精一著

彼の言説や政策の目的が、日本国民の主体の創出にあったという視点から、外国語の史料や文献をも利用し、さまざまな角度から検討を加えた一書。

▼A5判・四六六頁／定価九、四五〇円

明治維新期の政治文化

佐々木克編

京都大学人文科学研究所「明治維新期の社会と情報」の研究成果。政治史、文化史、思想史、精神史を融合した「政治文化」という視点からアプローチ。

▼A5判・三九〇頁／定価五、六七〇円

立憲国家中国への始動

曾田三郎著

明治憲政と近代中国

従来の辛亥革命史研究の枠組みを打開すべく、立憲国家中国の形成という観点から、明治憲政の影響を動態としてとらえ、叙述する中国近代史。

▼A5判・四〇〇頁／定価八、四〇〇円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著

佛敎大学研究叢書⑧

当該期の修身教科書への影響や教員の養成・日本人教員の配置など、現地における学校教育を多様な史料に基づき明らかにする。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円

条約改正交渉史 1887～1894

大石一男著

日本側の交渉戦略・交渉戦術、交渉相手の欧米列国の動向、日本国内における諸個人・諸集団の協力・対抗・競合の側面の三つの視角から分析する。

▼A5判・三五六頁／定価六、八二五円

貴族院と立憲政治

内藤一成著

明治から大正前期の院内会派、幸俱楽部、及び子爵議員を中心とした最大会派、研究会の動向を中心に分析し、貴族院に研究のひかりをあてた一書。

▼A5判・四三八頁／定価七、九八〇円

昭和初期一移民の手紙による生活史

中野卓・中野進共編

ブラジルのヨツチャン

昭和三（一九二八）年にブラジルへ移民として出国した中野義夫氏が日本へ送った書簡を中心に編纂。昭和という時代の一側面をとらえた貴重な資料。

▼A5判・二九四頁／定価二、九四〇円

法然伝承と民間寺院の研究

平祐史著

◆民間の浄土宗寺院に伝わる宗祖伝承や史料、民俗信仰の融合・統合、異義・異安心(異端)などを考察。
◆法然ゆかりの総本山知恩院に所蔵される古記録翻刻の成果も収載。半世紀にわたり、知恩院の史料編纂にも携わった著者による、記念碑的論集。

たいら・ゆうし：一九三一年京都市生。現在、佛教大学名誉教授。浄土宗海徳寺住職。総本山知恩院史料編纂所主任。

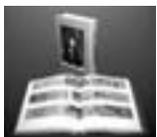
【6月刊行】

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

発行・浄土宗 大本山くろ谷 金戒光明寺

法然上人により開かれた紫雲山くろ谷金戒光明寺には、多くの文化財が蔵され公刊が望まれていた。法然上人八百年大遠忌にあたり、約五七〇点の宝物全点をFMスクリーン高精細印刷によるオールカラーの大型図版で掲載。

◎内容◎ 法然上人と金戒光明寺(法王満誉) 伽藍と庭園(写真水野克比古) I 仏像・彫刻 II 仏画 III 絵画 IV 経典・仏教書跡 V 古記録・古文 VI 書 VII 什宝・工芸他 歴代略譜と伽藍興隆(白苔頭成) 名墓録・くろ谷金戒光明寺備要 刊行物・年表・宝物目録



【4月刊行】

▼A4判変型・五一〇頁／定価二九、四〇〇円

法然上人八百年大遠忌記念

『観経疏之抄』玄義分 中

浄土宗叢書 第1巻

西山禅林学会発行・豊田元彦監修

法然上人(一一三三〜一二二二)をして「わが真実の弟子は善慧房證空」と言わしめた西山国師上人(一一七七〜一二四七)を派祖とする浄土宗西山禅林寺派の西山禅林学会による叢書。今回は、国師が善導大師の『観経疏』を講述した際、門弟である観鏡證入(一一九五〜一二四四)が筆録した『他筆抄』といわれる文献の影印研究。時宗総本山遊行寺に蔵される南北朝時代とされる現存最古写本を底本に、天文五年(一五三六)の書写奥書をもつ大谷大学図書館所蔵本を対校本とする。本刊行により、『西山全書』『西山叢書』より一層、国師の講述に近づくことが可能となるであろう。

【9月刊行予定】

▼B5判・二〇六頁／定価五、二五〇円

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

日本浄土教の祖師、法然の浄土教義、さらに證空や行観を中心に西山教義をまとめる。

▼A5判・三二〇頁／定価四、二〇〇円

江月宗玩 欠伸稿訳注

芳澤勝弘編著・江月宗玩原著

乾・坤 [全2冊]

龍光院蔵自筆本を翻刻。偈頌なども収録し、文化人の消息を窺う貴重資料ともなっている。

▼A5判・総一四一八頁／定価(各)九、九七五円

悟溪宗頓 虎穴録訳注

芳澤勝弘編著

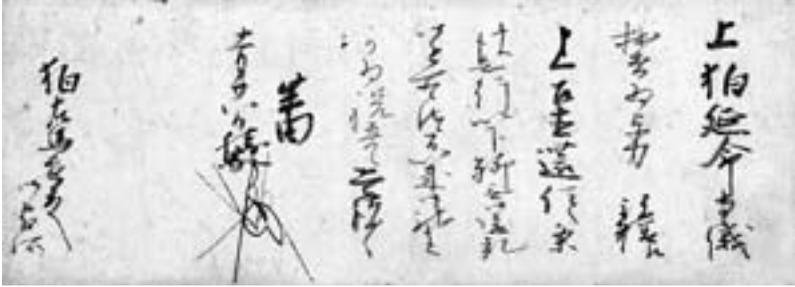
臨済宗東海派の祖、瑞龍寺開山である、悟溪宗頓(二四一六〜一五〇〇)の語録『虎穴録』を翻刻。

▼A5判・八四四頁／定価一〇、五〇〇円

美の縁

び

よすが



柴田勝家（一五二二〜八三）は織田信長に仕え、本能寺の変後は豊臣秀吉と対立し、天正十一年（一五八三）近江賤ヶ岳の戦いで敗れ、越前北ノ庄の居城で自害しました。その勝家から山城国上狇を拠点とする国人、狇左馬進へ宛てた書状です。

内容は、上狇の延命寺については、拙者の与力として殿様（織田信長）へ申し上げて、還住させることになりました。それらの知行については、聊かもお間違いないようになさって下さい。ご近所ですので、色々ごご援助頂ければ祝着です、と申し伝えたもの。

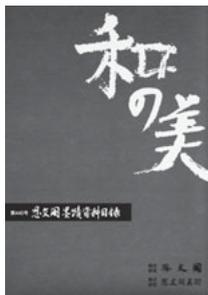
◆ 柴田勝家書状 ◆

すなわち、信長が勝家の与力として延命寺を認めて還住させ、その上で勝家が狇左馬進に対して延命寺の知行を認めて忠節を促したものです。なお、元亀三年（一五七二）十一月、信長は狇左京亮に対して狇郷の知行を認めており、さらに翌年、狇左馬進に対して家来四人と延命寺の知行を認めている（『大日本史料』元亀三年十一月条）ことにより、狇氏は元亀三年の段階で信長に従っていたことが分かります。柴田勝家の書状は巷間に出ることが非常に稀で、貴重な史料を今に伝えています。

（思文閣出版古書部・阿部尚平）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 355
TEL (075)531-0001 Fax (075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年4回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



高山植物図譜 全二冊

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 355
☎(075)752-0005 Fax.(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

美術品を売る、買う。

「思文閣大交換会」がいちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年4回の大入札会。
美術品を売りたい方、買いたい方双方にご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは

思文閣京都本社

TEL (075)531-0001

mail info@shibunkaku.co.jp

ギャラリー、思文閣 9月開催

青銅 畠山 耕治

2011.9.17 Sat - 9.30 Fri

金属ならではの落着きのある質感に、自然美の豊かな景色がもたらすハーモニーは、観る者の意識にかなりつよい印象を残し、ある種の魔性を内に宿していると思うこともある。

送られてきた写真を一覧するだけで、確実に私の心を捉え、机上に置いて見つめたい誘惑にかられる、極めて上質の工芸的造形作品と評したい。

林屋清三

畠山 耕治

1956 富山生まれ
1980 金沢美術工芸大学工芸科鍍金専攻卒業
2001 タカヤマ文化基金タカヤマ芸術賞受賞
2007 佐野ルネッサンス爵金展大賞受賞

所蔵先

ウィクトリア&アルバート美術館 / イギリス
バーミンガム美術館 / イギリス
フィラデルフィア美術館 / アメリカ
スウェーデン王立美術館 / イギリス
アバディーン美術館 / イギリス
デンマーク王室 / デンマーク
東京国立近代美術館 / 東京
金沢21世紀美術館 / 金沢
国際交流基金 / 東京
高岡市美術館 / 高岡
菊池寛実記念智美美術館 / 東京

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 386
TEL 075-761-0001 FAX 075-533-1779
<http://www.shibunkaku.co.jp/gallery@shibunkaku.co.jp>